三國志　～恋姫無双～

灰原 佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三國志　～恋姫無双～

【Ｎコード】
Ｎ９１４３Ｐ

【作者名】
灰原　佑

【あらすじ】
一介の学生である北郷一刀（ほんごうかずと）。彼が目を覚ました場所は三國志の世界であった。だが、歴史上に名を残している武将たちは何故か皆女性ばかり。訳も判らず戦乱の世に放り出された北郷一刀は彼女たちに助けられながらも必死に生きていく。
……いつか帰る日のために。

北郷一刀

荒涼とした大地のに砂と血にまみれた青年がいた。薄れ行く意識の中、北郷一刀（ほんごうかずと）は辛うじて片目を薄く開け、揺れる視界のなかに3人の人影が自分を見下ろしているのをじっと見ていた。

何か話しかけないと…、聞きたいことがたくさんある。

朦朧とする意識の中、必死に口を動かそうとしても既に限界に来ていたようで、視界がゆっくりと暗くなって行った。

突然のことだった。

3人組の男が囲むように距離を詰めてくる。その手には各々刃物を持ち、鈍い光りが日に照らされ放たれていた。

不意に背後からデクのような巨体を有している男に地面へ叩き付けられ、突っ伏している所を髪を乱暴に引っ張られ何も抵抗出来ないままアニキと呼ばれるリーダーに、刃物を喉元に突き付けられて持っていた荷物と、何が珍しかったのか北郷一刀の通っている聖フランチェスカ学園の制服を脅し取り、後は3人に殴られている途中で意識は途絶えた。

意識が急浮上し、飛び上がるように目を覚ました一刀。その直後、身体中に激痛が走り小さくうめき声を上げてうずくまる。

『……夢じゃなかったのか』

それだったらどんなによかったことか…と、殴られるシーンがフラッシュバックしながら、ゆっくり顔を上げ周りの様子を確認する。どうやら何処かの一室に寝かされていたらしい。

荷物や着ていた聖フランチェスカの制服はどうやら野盗に持っていかれたようで、今は包帯で隠しているような状態だ。

一刀は痛む体をいたわりながら静かにベッドから下りて窓際まで行き、外を眺めた。

表通りであろう道を人々が往来をしている。

それはどこにでもあるごく自然な光景だが一刀にとって目に映るもの全てがいつも通りではなかった。

「ここは…やっぱり日本じゃない」

とうに昼を向かえていたらしく、太陽は天高く輝いて照らしていた。宿であろう建物の2階から見える景色は普段見慣れた天を衝くビル群など一つもなく、古風な木造建築が立ち並び道行く人々は時代錯誤な服装に身を包んでいる。

———異世界、パラレルワールド…そんな単語が頭を過ぎる。何故

こんなことになったのか理由は判らない。ただわかっていることは聖フランチェスカ学園でいつも通り授業を受けている途中、居眠りをしていたところまでの記憶。

「……あれ？夢か…やっぱり…？」

頭が混乱してきた。傷が痛み考えるのが辛くなってきた。今はただ休みたいと身体が訴えて来ているようだ。

寝台に腰を下ろし、横になろうとしたとき、不意に戸の向こうから気の抜けた声が聞こえてきた。

「もしもし～　入りますよー」

わざわざ確認をとっている声の主は、まだ返事をしてないのに部屋に入ってきた。

「おや～？凛ちゃん凛ちゃん　どうやら目を覚ましたようですよ～」

しかも一人ではないようだ。

「…そのようですね」

「どれどれ、…ふむ。まだ全快、というわけではないようですな」

…もう一人いました。

先頭に入ってきたのは眠たそうな眼と、膝下まであるブロンドの髪が印象的な美少女。更に久しぶりに見たペロペロキャンディを片手に頭には太〇の塔らしき人形が乗っかっている個性満点な女の子の

ようだ。

その後ろにいる利発そうな眼鏡を掛けている女の子と、一刀を一目見て怪我の具合を測った、なにやら掴み所のない雰囲気を醸しだしながらも隙間のない猫のような女の子。

こちらの二人もタイプは違うが美少女だ。

「気分の方はどうですか」

「…え？あ、はい…まだ少しだるいですね」

眼鏡の子が眼鏡の位置をクイっと上げながら声をかけてきた。

目を覚まして美少女3人に囲まれるとか、何処のゲームだよ…なんてボーッと考えてた一刀は突然の質問に少し動揺しながらも応える。どうやら荒野で倒れていた所を助けてくれたみたいだ。

「そうですか。では、また後で来ますので休んでいて下さい」

「…すいません。助けていただいて我が儘まで言って」

何、当然の事をしたまでと、猫のような女の子に言われ本当にいい人達らしい。緊張が解れてきた。

「そうだ、疲れている所すまないが先に自己紹介だけでもしておこう。私の名前は趙雲という。そして―――」

隣に居る眼鏡の女性の人に促すように視線を向ける。

「私は戯志才と名乗っています。」

眼鏡の子は堂々と偽名宣言をしてきた。だが悪い人ではなさそうなので深く聞かないでおく。

そして最後の女の子なのだが…。

「……ぐぅー…」

「寝るな！！」

戯志才がいつの間にか寝ていた不思議ちゃんに怒鳴る。すると、さして驚いた様子を見せず驚いた様に起きた。

「…おぉっ！？温かい陽射しを浴びていたら思わず～。さてさて、風は程立といいます～。よろしくですー」

呆れた空気が流れる。が、いつまでもこの状態にしておく訳にもできないので自分も自己紹介することにした。

「あの…北郷　一刀っていいます。よろしく。」

すると趙雲がなにやら思案顔で一刀の名前を反芻する。

「…変わった名前だ。まぁ、積もる話しは後にして今はゆっくり休むとよい」

一刀はその言葉に甘えて、礼を言ってまた眠ることにした。

疲れていたようで、すんなり寝入った一刀だがその前に疑問が幾つか頭に過ぎる。

「…趙雲か。まさかな」

三国志の有名武将と同じ名前。だがそうだとしても俺が知っているのは男のはず…。それに戯志才と程立。この二人も聞いたことがある…有名な軍師だったはず。

もちろん記憶には男のはずなのだが…確かに三国志の時代と言うならば、外の景色も納得がいくような気がする。

理由は町並みが日本でないのと見る限り物品やデザインがレトロという意味ではなく文字通り古いから、の二つだからである。もちろん確信しているわけではないが今は納得しておかないと余裕がもてなかった。

考えればきりがない。もう既にキャリーオーバーだと一刀は思考を放棄し、一時休むことに徹した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

時を同じくして各地では黄色の火種が燻り始めていた。

———蒼い蝶がゆっくりと窓辺に舞い降りる。

運命の邂逅

日没。身体の傷はまだ痛むが既に倦怠感は無く、意識もはっきりしていた。

一刀はゆっくりと体を動かし、凝り固まった筋肉を慣らしていく。

町も日中に見た活気は消え、ポツポツと人影が見える程度で閑散としていた。

服を盗られていたのだが、ありがたいことに用意していてくれたようで無地の服を纏い、宿の一階へ下りていく。そこは食堂のようで円卓が六つ置かれ全て満席となっていた。

その中の階段前にある席に戯志才(ぎしさい)と程立がお茶をしているようだった。

「おはようです～お兄さん」

眠たそうな顔と声で一刀に気づいた程立が声をかける。

片手を上げて応え、戯志才に促されるまま空いてる席に座る。

「趙雲さんは？」

「星ちゃんなら大事な用があるとかで、出掛けてますよ～」

『……？』

「どうせ彼女のことだからメンマでも買いに行ってるのでしょう…」

呆れた口調で一口お茶を飲む。隣ではのほほんとキャンディを舐めてる程リツ。

交互に視線を移し、一刀は先程感じた疑問を投げかけようとした時――

「あの、気になることがあるんだけど…呼び名に「――きゃあぁっ！！？」

突然外から悲鳴と物の壊れる音が聞こえてきた。宿に動揺とざわめきが起こる。

3人が外に出ると火事を知らせる鐘が夜の街に響き渡っており各所から火の手が上がっていた。

一刀は逃げ惑う人達と崩れる建物をただ棒立ちになって見ているしかなかった。

「…最近酷くなってきてますねー」

「……え？」

いつもの気のぬけた顔はなく真剣な眼差しで程立は呟く。その声にも何か重みがあった。

「…漢王朝に力はもうありません。自らが動かなければ何も変わりはしない」

戲志才が眉間に皺(しわ)を寄せていた。

一刀は自分の置かれている状況がひどく殺伐とした世界にあることがジワリと認識として滲んできた。

見知らぬ土地で目覚め、野盗に襲われたと思ったら、次は暴徒と放火に巻き込まれ情報の処理が間に合わない。

呆然としている一刀の眼に遠くから黄色い布を被る集団が人を斬りながら近づいてくるのが映る。

現実感がない。

生々しい光景がスローモーションの様に動いていた。

「――殿っ！北郷殿危ない！！」

戲志才の叫び声が遅れて届く。いつの間にか暴徒の一人が死角から来ていたらしく、一刀に向けて今まさに剣を振り下ろそうとしていた。

「っ！？」

咄嗟に両手で身を守るが意味のないことは一目瞭然だった。しかしその刃が何時になっても来ない。恐る恐る見ると、暴徒が振り上げたままの大勢で固まっていた。

視線を相手の鳩尾へ向けると槍が突き抜け、血が地面に滴り落ちていた。

「危ないとこでしたな。お三方。」

崩れ落ちる暴徒の後ろから姿を現したのは物々しい槍を握り締めた趙雲だった。

「お兄さん。危ないとこでしたねー。…お兄さん？」

3人は一刀が血溜まりを一点に見つめ、顔面蒼白になっていることに気付く。

ぴくりとも動かない一刀に心配し、趙雲が肩を揺らそうと近づいた瞬間、一刀は口を押さえ走り出し宿の隅に胃の中の物を吐きだし始めた。

『どうして俺はこんな所にいるんだよ』

昏倒しそうになるのを堪えながら、暴徒の姿をフラッシュバックさせる脳を振り払うように吐き続けた。

いきなり見知らぬ土地で野盗から洗礼を受け、癒えぬ傷を負ったまま立て続けに戦場さながらの血みどろの現場に巻き込まれる。

現代の日本に居た一刀には信じられない光景に、遂に限界がきていた。

だが、臭いが、音が、感触が、全てが現実だと告げてくる。

もう夢なんかじゃない。納得した訳ではないが、どういう世界かは理解出来た。

寝て覚めても自分の知っている所ではない。痛みも空腹もある。

何の運命か、この殺伐とした世界に自分は確かに存在している。

「大丈夫か北郷殿」

趙雲が先程までの躊躇のない鋭い目つきから本当に心配する眼差しで一刀の背中を摩る。

気持ちが和らぐのを一刀は素直に感じた。

「もう、大丈夫。」

礼を言って静かに立ち上がる。見計らったように戯志才が周りを一瞥してから口を開いた。

「…鎮圧部隊が既に動いています。治まるのは時間の問題ですが、念のため安全な所へ避難しましょう」

全員が頷く。

移動しているなか一刀は自分の知識をフルに使い考えていた。

戯志才の言っていた言葉に漢王朝という単語が出てきた。そして趙雲とこの二人。街並みも含め一刀は数千年前にタイムスリップをしたことになる。つまり、あの有名な三国志…正確には後漢の時代。

気にかかることは歴史の資料では男のはずが、見た目が自分と同じくらいの少女・女性だということだ。

更に驚くべきはこの状況に全くと言っていいほど、動揺が見られない。趙雲に至っては人を一人殺していた。

それが何よりショッキングな場面でもあった。だが、おかげで命拾いしたのも事実。

「…趙雲さん。さっきはありがとう。」

「ふっ。当然のこと」

微笑を浮かべながら応える彼女に、“強い”と思った。

もちろん前を先導して行く二人にも…。

不意に目の前を青い蝶々が飛んで行った。何気なしに目で追うと小柄な…それも美少女だ。

金髪の両サイドを縦ロールにした女の子が怒号の混じった声で屈強な男達に、次々と指示を飛ばしていた。

その両隣には長い黒髪をオールバックにし、大剣が目を惹く女性と、弓を持った蒼髪の女性。左目を隠した前髪がミステリアスな雰囲気を醸し出していた。

『この世界は女性が権力を握っているのか…？』

――――眼に映る人たちが北郷　一刀の運命に大きく関わってくるのはもうすぐのことだった。

戯志才の言っていた通り、鎮圧は程なくして完了した。被害も思っていたほど酷くはなく、復興支援も直ぐに準備されて迅速な対応が施されていた。

一刀自身は政に詳しくなかったが、程立と戯志才が褒めていたのでそうなのだろうと納得していた。だが、驚いたことが一つあった。

なんと、指揮を執っていたのはあの有名な“曹操”らしい。しかも金髪縦ロールのあの小さい少女だったのだ。しかも更に話しによれば黒髪の女性は“夏候惇”。蒼髪の方は“夏候淵”ときた。

なんてでたらめな世界なんだ。一刀は項垂れていた。

「飲まなきゃやってられねぇよ」

お茶をがぶ飲みしながら唸っている一刀を目を丸くして見ている三人。（性格には戯志才と趙雲であり、程立は眠そうな目を向けているだけだが）

「…まぁ、よくわからんがメンマなど如何かな？」

趙雲が差し出したメンマの入った瓶をチラリと一瞥し、数秒後いらないとだけ言い、一刀は円卓に突っ伏した。

『なんでこの時代に瓶なんて容器が存在してるんだよ…』

いろんな水準がバラバラで困惑する。道行く人々のほとんどは布を縫って誂(あつら)えたような意匠なのに同席しているこの三人はヒラヒラのフリッフリだ。

…似合ってるから別にいいんだけどね。と、小さくため息を吐く。

そこで不意に思い出したかのように面を勢いよく上げる。何事かと固まっている三人に一刀は気になっていたことを尋ねることにした。

「…ん？どうしたのみんな？」

怪訝な表情で見てくるみんなに首を傾げる一刀。よくわかってない一刀に趙雲が代表して口を開く。

「いや、何やら思いつめていたかと思えば何事もないような顔になったりと面白い人だなぁ…と。」

「ああ。深く考えるのを止めたというか…気にしたら負けっていうか…ね！」

悩みに悩んでいたら一周回ってここはそういうことなんだと、勝手に脳が順応してくれた。ということにした一刀は適当に流して置いてけぼりの三人に本題に入った。

「ところで、気になってたんだけど三人とも変わった呼び名で呼んでるでしょ？あれって何？」

一斉に眉を顰(ひそ)める。

「ん～？何かありましたかね～？」

程立が質問の意味がわからないというように首を傾げる。それに対しほかの二人も同様に傾げる。

「ほら、君だったら確か…“ふう”だっけ…？」

後悔先に立たず。とは、この事だろう。気づけば趙雲に槍を突き付けられ程立は今にも泣きそうな顔をしていた。

「北郷殿。短いながら付き合いのある我らだが、容認しがたいものもあるな…」

宿内が凍り付いた。趙雲の放つ殺気に当てられ、宿長たちは奥に引っ込み、ほかの客もそそくさと退席していくのが見えた。

一方、殺気と切っ先を両方向けられている一刀は全身に冷や汗をか

き、両手を顔の横に上げて動揺に身を震わせていた。

「ちょちょちょちょっと待って！！？いい、いきなり何！？あ！止め！当たってる先っちょが当たってる～！！！」

焦る一刀を無視して淡々とした口調のまま戯志才が口を開く。

「待って下さい星（せい）。真名を知らないのは少々気にかかります。まずは話しを聞きましょう」

趙雲は逡巡した後、ゆっくりと槍を下ろし、程立はあの、緩い表情からは想像出来ないほど怯えた顔をしていたが、

話しは聞いてくれるようなので一刀はホッとしていた。

そしてなんとも言えない空気のなか、一刀は自身に起きた経緯を語り始めた。

冀州へ

一刀はすっかり冷えたお茶を口に含み一息ついていた。

3人の顔を見ると、一様に考え事をしているみたいで、程リツもすっかり怯えを忘れ、眼をつむっている。

「未来からとな…ふむ。にわかに信じ難い話しだが、何か証明できるものはありますかな」

自分がどういう状況下にあるのか…未来から来たことなど…整理しながら少しずつ伝えていく。

もちろん、歴史上の3人が男性であることも。

3人は話しを聞くごとに驚きと興味を示してくれたがやはり懐疑の念はあるようだった。

「証明出来るものか…荷物は全部盗られたし……」

何かないか腕を組み唸っていると、ポンッ…という音を立てて閃いた。

「そうだ！趙雲さん。貴女の字は子龍でしたよね。そして戯志才さん。貴女の本名は郭嘉…郭奉孝。合っていますよね。二人とも俺の時代では有名ですから。程立ちゃんもね。」

二人の顔が驚愕に染まる。

「…なるほど…確かに、信じるしかありませんな。それに後世にまで私の名が語り継がれているとは…悪い気はしませんな」

喉の奥でクツクツと笑う趙雲に眼鏡を位置を正す戯志才。

「それにこの時代の人間ではないのならば真名の存在を知らないことも納得出来ます。」

一刀もこんな眉唾の話しに理解を示してくれたことにホッと胸を撫で下ろしたが、戯志才の“しかし”と付け足す言葉に緊張が走る。

「真名と言うのは私達にとって命と同等の尊いもの。その名を呼べるのは名付けて下さった両親と自らが許したものに預ける愛称。」

それ程大事なものだと説かれ、一刀は申し訳ない思いが急激に押し寄せてきた。

「すいませんでした。知らなかったとは言え、軽々しく呼んでしまって」

切られても文句の言えない自分に弁解の余地まで与えてくれて、謝ることしかできないが深々と頭を下げ程立の言葉を待つ。

「……ぐぅ」

「寝るなっ！貴女の話しをしているのですよ風！！」

程立の何ともマイペースぶりに戯志才が円卓を叩く。

「おぉ！怯え疲れて思わず夢の彼方へ行ってしまったのです」

「ところで兄ちゃん。生娘の真名呼ぶなんていい度胸してんな」

「――――っ！？本当に申し訳ありません！って誰？」

もの凄く雑な声色なので誰が言っているのかは一目瞭然だが、一応程立の頭の上に乗っている人形に聞いてみる。

「おれだよおれ。宝慧だよ」

「…包茎？おれはずるム「それで風は許すのですか？」」

……意図して遮られたが、ありがとうと伝えたい一刀だった。

「まぁお兄さんにも事情があるようですし、今回だけですよ～」

いつもの眠そうな顔に戻った程立が菩薩に見えた。感謝の心で拝んでいると突然3人が立ち上がる。

「あれ？みんな何処か行くの？」

「ん？何を言うか北郷殿。一件落着になったのだから早めにこの街を出るに決まっておろう」

尚も分からないという顔を一刀はしていると戯志才が癖なのか、眼鏡をクイッと上げ趙雲の言葉に補足を加える。

「理由はどうであれ剣（鑓）を抜いたのです。既に勅使の耳にも届いていることでしょう…できれば役人のお世話になるのは避けたい

ですから直ぐに出立するのが得策ということです」

なるほど、と頷いているといつの間にか程立が部屋から荷物を持ってきており準備万端であった。意外と俊敏なのかもしれないと一刀は思った。

「…でも、流れ的に一緒に逃げるぞって聞こえたんだけど…いいの？」

いくら許してくれたとはいえ先ほどまで、殺伐とした雰囲気の仲だったのに今ではさも当たり前のように一緒に街を出るぞと言ってきたのだ。本当に何も思っていないのだろうかと不安を口にする。それを聞いた趙雲は片眉を上げ、一刀を横目に微笑する。

「ふっ。お主のような面白い人物を置いて行く訳がなかろう。それとも事情聴取されたい物好きなら何も言わんが…」

正直願ってもない提案だった。状況の整理は出来たが、やはりこの世界に知り合いなどいない。ならば一人で不安になっているより縁のあるこの3人についていってこの世界のことを学べたら良いと思いつつ、できるならば帰る方法を見つけたいと考えていた。

「…またお世話になるよ。よろしく」

4人は左右に広葉樹が広がる道を北に向かって歩いていた。道中話を聞くと3人は現在見聞の旅をしているとのことだった。様々な土地に赴き自身が心から仕えたいと思う人物を探すのが目的だと言っ

ていたが一刀の中では予想は立っていた。一般的な知名度では趙雲には劣るものの戯志才（郭嘉）と程立は有名な智略家であることをしっていたので魏の曹操に仕えるだろうと…。言わずもがな趙雲は同じく後の蜀の劉備に魅かれその下へ向かうことだろう。

「ところで、今から何処に行くんだ」

ちなみに、一刀はこの旅の中で敬語を止めた。趙雲が同じ旅仲間に堅苦しい言葉は不要…とのことらしい。それだったら戯志才――――一刀は戯志才の本名（郭嘉）を知っているが、本人から旅が終わるまでは偽名で通してくれと言われている。――――は、いつも敬語だけど…と言うば、返ってきたのは“稟ちゃんから敬語と鼻血を取ったらただの頭のいい眼鏡になっちゃいますー」とのことだった。

『…鼻血？』

戯志才に追いかけられている程立の光景を尻目にどんどん進む趙雲。一刀も和む光景を後にして、小走りで追いかけた。

「む。見えたぞ北郷殿。」

そして森を抜けた先には大陸の2大運河…黄河が目の前に広がっていた。趙雲の横に並び、海と見間違えるほど広い川を呆けるような顔で眺めていた。

「このまま舟で冀州（きしゅう）に渡り、勃海（ぼっかい）を抜け…幽州（ゆうしゅう）に向かう。」

今の所の予定はこんなものだ。趙雲は初めての黄河に口がぽけ～っと空いてる一刀を覗き込みながら説明する。

地名を言われてもいまいちピンと来ないが東北の方面だというのは何となく知識としてあった。

「冀州ってどういうとこ？」

「それはですね～「うわ！いつの間に！？」」

程立が音もなく隣に立っていた。眼を細めながらいつもの口調で続ける。

「河北で最も豊かな土地を有していて、そこを治めているのはあの有名な袁一族ですね～」

「袁一族って、もしかして袁紹って人がいる所？」

「おや、それも天の知識ですかな」

趙雲の言葉に相槌を打ち、流れるように首を傾げた。“天の知識”とは何のことのか…一刀は質問を返す。

「うむ。実はな…ある噂を思い出したのだ。」

唇に指を添え、考える仕草をする趙雲。そこに程立も入ってくる。

「天の御遣いが現れるってあれですかー」

相変わらず首を捻る一刀に趙雲は静かに話し始めた。

「――要するに、戦乱を治めてくれる存在がおれだって言いたいの？」

「少なくとも、それならばお主の未来から来たという話しにも信憑性がもてると私は思うが？」

そうですねーと、程立も肯定を意を見せる。

天の御遣いやら戦乱を治めるだとかは言い過ぎな気もするが、その噂の人物を指しているのが自分ならばあながち間違いではないのかも知れないと記憶に留めておくことにした。

そんなこんなで時間が経っていたらしく姿のなかった戯志才が沿岸から呆れた顔で歩いて来るのが見える。

「何をやっているのですか貴方たちは！人が舟の手配をして待っていたのに何時まで油を売っているのですか！まったく。」

「今行こうと思ってたところですー。」

「おお。さすが凛。手際がいいな。すまん。」

素直に謝る程立と趙雲だがその返事にはまったく反省の色が見えず、その姿に何故か自分が悪い気がして肩を竦める一刀であった。

黄河は支流が多く、上流・中流から黄土高原と呼ばれる場所からシルト状の土を侵食して流れてくるため大量に含んでいる黄土が川の色を茶褐色の混じる黄色へ染め上げる。正直なところ綺麗とは思え

なかったがこの辺に住んでる人たちにとってはやはりなくてはならないものなのかと、船から顔だけ覗かせて河を見る一刀。今更だがこの時代は慣れ親しんだ便利な現代とは違い、著しく生活水準が低くなっていることになっている。まだまだ不安要素があることが一刀に暗澹(あんたん)な気持ちにさせた。

ネガティブになっててもしかたがないと首を振り、着くまでの間一眠りすることにした。ゴツゴツと堅い舟によしかかる様に目を閉じる。

「着いたら起こしてくれないかな。」

「うむ。了解した。」

少し図々しかったかな…と、気になったが趙雲の了承が得られたので甘えることにした。それに揺ら揺らと浮かぶ揺り篭にすっかり身体が休息モードに入ってしまっていた。

船頭の櫂(かい)を漕ぐ音が黄河の水流に溶け込むように…一刀の意識も溶けるように眠りについた。

冀州へ（後書き）

戯志才という人物は実際にいたらしいですよ。

郭嘉が曹操に仕える前に亡くなったようです。

しかも知り合いだったとか…

袁の領

コトン。と、沿岸に着けた舟が慣性により揺れる。微かな振動にぼんやりと一刀は眼を覚ました。

「丁度良い。着きましたぞ北郷殿」

すっかり寝入ってたらしく、伸ばした体が小気味よい音を起てる。思わず気持ち良さから脱力した瞬間、また夢心地に誘われそうになる。

しかし待たせる訳にもいかず、気力で起き上がり桟橋に降りる。

軽くあくびをしながら周りを見渡す。港…というより岸辺に橋を造り、船頭たちの休憩小屋を建てただけの殺風景な場所であった。

「風！起きなさい！いつまで寝てるのですか！」

突然の大声に寝ぼけていた意識が覚醒する。声の方面に視線を向けると毎度お馴染みの光景が広がっていた。

みんな上陸しているのに一人うつらうつらと舟の上で寝息を起てている程立。波立つ長い髪がそよそよと揺れ、幼い顔立ちが陽に照らし出され、美しいブロンドに天使の輪が光る。

和む。見ているこっちも思わず夢心地に浸ってしまいそうだ。一刀の頬はだらしなくなっていた。

「おや。北郷殿は風みたいな幼い娘に興味があるのですかな」

心臓が肋骨を突き破ってくるかと錯覚すれほど一刀は跳ね上がる。

「な、何を言ってるんですか！！たた確かにかわいいなとは思いましたけどどどどど」

趙雲が後ろから耳元で仰天の発言をしてきて、変な汗が吹き出る。否定の言葉を言うものの、動揺が全く説得力を持たせてくれなかった。

このままでは有らぬ誤解を招いてしまう。混乱の一途を辿る一刀の暴走は止まらなかった。

「趙雲さんもかわいいですよ！しかもカッコイイです！――あっ…」

沈黙が流れる。とりあえずリセットボタンを探したが、見つかるはずもなく恥ずかしい会話を全員に聞かれてしまったことは自動セーブされた。

「くくく。天の御遣い殿もなかなかに初心なお人のようだ。…だが、お世話でも嬉しいものですな」

一刀は顔を真っ赤にして俯いてしまった。趙雲は侮れない人物。クスクス笑っている趙雲にジト眼を向けるが軽く無視された。

この世界の一番おかしい所は決して見た目が年齢と比例しないことだ。道中話しを聞いている際、戯志才や趙雲はまだしも程立みたいな子供まで危険な旅をするのは大変ではないのか…と、本当に心配からでた言葉だったが、あの程立が眉を寄せむ～っと唸りながら睨みつけてきたのだ。

『失礼ですね～。風はもう１８歳を越えてますー。』

乙女のため正確な年齢は伏せられたがそれにしても驚きである。

閑話休題

「星。からかうのもいい加減にしなさい」

程立を連れ立って戯志才が諌めてくれる。一人でもこういうことを言ってくれる人がいると非常に助かる一刀であった。

「兄ちゃん。そういう眼でいつも見てたのかい。いい趣味してんな」

終わりかけた話しに宝慧が追い討ちをかけてくる。

「うぐっ！？違うんだぁ。」

「まぁまぁ。お兄さんがそういう人だというのは顔にでているではないですか～」

驚愕の事実である。自分は変態の顔だと言われているようなものだ。そんなに酷いのかと、黄河を覗き込むが黄土を含む川の色は茶褐色に黄色が混じった透明度ゼロのため、確かめることはできなった。

「風もからかわない！北郷殿。気にしないでください。人それぞれですから…」

『…眼が冷たいんですけど』

一刀はがっくりと肩を落として、いたたまれない気持ちのまま歩きだした。

「お兄さん。道こっちですよ～」

本当に情けない。一刀の周りに鈍よりと影が斜に掛かっていた。そんな姿に3人は密かに笑っていたのだが、知るよしもなかった一刀である。

冀州（きしゅう）――河北でも豊かな土地に恵まれた中心として旺盛していた。県の一つである勃海（ぼっかい）より南西に下った魏郡に4人はいた。ここ一帯は中原と呼ばれており、比較的盆地が多いらしく一刀は単純に“中原”だからかな…と、安直な考え方をしていた。

どうやら趙雲は冀州の生まれで常山という所では有名人らしい。一刀にとってみれば歴史的に有名なので意外とは思わなかったが、やっぱり凄い人なのだと改めて実感した。

一行は船着き場から趙雲の道案内を先頭に戯志才と程立が並んで歩き、最後尾に一刀が全員の荷物を持って進む。

荷物に関しては助けられてばかりなので何か役に立ちたいということで、率先して持っているのだが…これが重い。頭にクソがつくくらい重いのだ。趙雲が言うにはすぐ近くに村があるとのことだったが、交通手段の限られているこの時代…近いと言ってもこの人たち

には近くても現代人の一刀には軽くタイタニックの前編を見れるくらいの距離に感じられた。

余りに重いので少休憩の際、悪いと思いつつ3人の荷物の中身を隠れてチェックしてしまった。

3人とも同じ麻袋なのだが、まずは戯志才（郭嘉）の袋を開ける。ザッと見て本がぎっしり詰まっていた。底が破れないように袋が何重にも被せてある工夫がしてあった。何度も読み返したのだろう…汚れてはいるが大切にされているのがわかる。

『まぁ。仕方ないか…本はかさ張るし、重いよな』

むしろ今までこんな重い荷物を女性が背負って歩いていたことに感心と驚きを抱く一刀であった。

次に趙雲の荷物をだが、3人の中で一番重いのはパンパンに膨れ上がったこの麻袋。重たいし痛いのだ。ゴツゴツとした何かが背中を圧迫して、完全に筋肉痛直行である。背中を摩りながら中を覗き込むと思わず固まってしまった。

『……メンマ？』

呆れて声もでない。袋のなか全部、メンマだけなのである。しかも瓶詰。そりゃあ重いわけだ…と、簡単な感想だけ述べて、そっと口を閉めた。

何にせよ、旅にメンマだけってのは舐めてるだろう。手ぶらでついて来ている自分が言うのはどうかと思うが、少なくとも今回は仕方ないパターンである。それがメンマである…。もしかして前の街（

陳留という街らしい）で買っていたという物は本気でメンマだけだったのか。一刀は眉間を指で揉んだ。

最後は程立。こちらもなかなかに重かったが多分戯志才と同じ本関係だろうとある程度の当たりをつけていたが、結果を言えば彼女の不思議要素が浮き彫りになっただけだった。

出て来るもの出て来るもの全く意味の解らない物ばかりで、綺麗に楕円の石や硯も墨もないのに筆だけあるとか、いつ使うのか疑問符が頭に付くものばかり。取りあえずそういう物に挟まれて砕け散ったキャンディだけは使えそうだった。

「さぁ。そろそろ行きましょうか。」

水分補給が終わった戯志才が立ち上がる。続いて2人が服についた汚れを払いながら立つ。

「それにしても助かる。全員の荷物を持ってくれるなんて、中々頼もしい御使い殿だ。」

「お兄さんは優しいですね～」

「…はは。お役に立てて俺も嬉しいよ」

若干、捨てたい荷物があるがこれも恩返しのためだと踏み止まり、上手く笑えているだろうかと心配になる一刀。

今更ながら見なきゃよかったと、余計疲れた脚を引きずりながら進む…晴れた空が眩しかった。

◆◇◆◇◆

絢爛とした庭と接する廊下を優雅に雄々しく、縦ロールをかけた長い金の髪をなびかせながら歩く女性がいた。

その少し後ろの左右に控えている女性の一人が口を開く。

「麗羽さま。南西部の山間付近に賊が現れたとの報告が…今回も頭に黄色い布を巻いた集団らしいのですが。」

麗羽と呼ばれる女性がうんざりした顔で振り向き、盛大に溜め息を零す。

「もう！またですの！そんなくだらない報告を一々私（わたくし）にしなくても顔良さんが片付けなさいな」

「麗羽さま。最初はあんなに張り切って討伐隊率いてたじゃないですかー」

少し粗雑な口調の印象的な若葉色のショートヘアーの文醜が両手を後頭部に組んだまま、ぶっきらぼうに口をだす。

「飽きましたわ。あんなのに関わっている時間があればお昼寝してたほうが有意義だとおもいません？」

何とも傲慢な態度が見て取れる発言をするのは冀州を治める主、袁紹。青髪のショートボブが顔良の苦笑した顔に良く似合っていた。

「それに私は大将軍に喚ばれてこれから洛陽に行かなければいけませんのよ。後は斗詩さん（顔良）と猪々子さん（文醜）が何とかす

ればいいでしょう」

2人の呼び止めるも聞かずそのまま自室に戻ってしまった麗羽（袁紹）。我が儘な主に頭が痛くなる顔良は、まぁ…いいじゃんか、暴れられるし。と短絡的な親友に胃痛まで抱えることになる苦労人であった。

『…はぁ。大丈夫かなぁ』

買物

村――この時代では邑(ゆう)と謂われているらしく、ほかに町とも里とも意味が取れて案外大雑把なので訪れると、村というには結構広さもあり、人口もいたりする。

着いたのは太陽が真上から少し傾いた頃で大体午後1時、2時の間といったところだった。

「結構賑わってますね～」

てくてくとキャンディをくわえたまま露店を眺める程立。顔はいつも通りだが、何だか楽しそうに見えるのはやはり女の子だから買い物が好きなのかもしれない。

「俺、こういう光景に少し憧れてたんですよ。住んでたところはデパートっていう店ばかりで人と人との触れ合いっていうんですか…昔ながらの人情味溢れる店が減ったな～って。こっちに来てから大変なことばっかりな気がしてたけど…こういうのがあるなら悪くないかな」

元の世界への憂愁と趣のある気色に少し抱いた複雑な気持ち。どこか遠くを見る眼で一刀は自嘲めいた笑いを浮かべる。

「はは。ごめん、何言ってんだろうな。」

頬をぽりぽりとかきながら照れ笑いに変えて横を見る。

「おじちゃん。一人でしゃべっててたのしー？」

「……」

後方を振り返るとウンウン唸りながら本を吟味している戯志才に饅頭屋のおばさんと楽しく談笑している趙雲。

横に居たと思っていたのに、いつの間にか入れ代わっていたどこぞの知らん幼女にセンチメンタルなクサい台詞を吐いていたのかと思うと切なくなってきた。

「おじちゃん何で黙っちゃうの？もっとおはなししてー」

「嬢ちゃん…メンマ食うか？」

裾をクイクイ引っ張って見上げてくる幼女の頭をクシャリと撫でた。

宿に入ると意外に繁盛しているようで宿の奥にある広間から話し声が響いてくる。まだ日は高いのだが、宿の主人に話しを聞くと勃海に続く山道が例の賊に占拠されて皆、足止めを喰らっているらしい。と、逆に儲かっている宿の主人は複雑な心境だと語る。中々出来た人だなぁ…と一刀は感心した。

「しかし、困りましたね。明日の朝までにどうにかなっていればよいのですが…」

いい買い物が出来たのか、若干ホクホク顔の戯志才がドサッと冊子の束を床に下ろす。一刀はもしかして荷物増えるのかとそれを見て

不安を覚えつつ、顔は真っすぐ戯志才に向けて聞いていた。

「まぁ、いずれにしろ今日はここに滞在することになるのであろう？色々調達しなければいかんのでな。北郷殿のものとかな」

俺の？という訝しげな目で首を傾げる一刀。趙雲は後のお楽しみだと言うように軽く口角を上げ、一刀を見入る。

「お買い物でしたら風も付いてくですー」

「では私は留守番をしていますので物資の調達は3人に任せます。」

無駄遣いしないようにと眼鏡越しに光る眼で念を押しながら戯志才は懐から巾着袋を程立に預ける。それを大事そうに小さな手で受け取るのを見てると母親が子どもにお使いを頼んでいる光景のようで、微笑ましい。

「お兄さん。いま失礼なこと考えてませんでしたかー？」

ムムムと眉間にしわを寄せ、不機嫌な声をだす。いつもは緩慢な性格をしているのにこういう時は勘がいいため冷や汗をかいてしまう。何とか平静を装い、否定の言葉を口にするが返ってくるのは“そういうことにしておきますー”の一言。

「何をしている北郷殿。早く行ないと日が暮れてしまう」

「……はい」

見送る戯志才はあんな体裁の男が天の御遣いと云うのだから笑えてくる。と、呆れた笑みを浮かべながら部屋へと向かうのだった。

「すみませんが荷物を部屋まで運んでもらえますか？」
振り返り、置き去りにされた大量の荷物たちを任せる戯志才に宿の主はギョッとした顔で積み上げられた荷物を見上げていた。

「それで何を買うんだ？」
路頭に並ぶ店を眺めながら隣を歩く趙雲に尋ねる。
「うむ。お答えしよう…それは武器だ。」
2、3回瞬きした一刀は趙雲へ振り向き反芻するように再度“武器？誰の？”と尋ね、爽やかな顔で…。
「もちろんお主のだよ。」
そう返された。
「いやいや！無理だって。真剣なんて持ったことないから！！」
両手を顔の前で勢いよく振り、遠慮をみせる一刀。
「いいじゃありませんか。宿でも賊が出たって言ってましたしー。護身用に一本持ってたほうが安心ですよー」
趙雲の奥を歩く程立が買ったばかりのキャンディを舐めながら必要

性を説く。

確かに一理はあった。初めてこの世界に来た時は野盗に追いはぎに会ったのを思い出し、下手したら死んでいたかもしれないことに軽く背筋が震える。

「そしたら、程立も持ってたほうがよくないか？」

「風は星ちゃんに護ってもらうから必要ないです～」

さも当然という顔をしている。趙雲も任せておけと頷いている。

「えー！ずるい！俺も護ってもらう！」

「「……」」

「…うん。ごめん。今の情けない発言は無しにしてください。」

口の塞がらない顔で見つめてくる2人にいたたまれない気分になった一刀は穴があったら入りたかった。

「気づいたなら一歩前進だぜ。兄ちゃん。」

フォローしてくれる宝慧が余計虚しい一刀であった。

◆◇◆◇

「なぁ斗詩（とし）」

「何？　文ちゃん」

大地に煌めく金色の兵隊が規律正しく行軍していく。先頭を行くのは誉れ高い袁家に仕える猛将、文醜。同じく顔良。…なのだが。

「やっぱりどうせやるなら派手にいきたいよなぁ」

「えぇ～。別にわざわざ危険を冒さなくてもいいんじゃないかな…」

お気楽極楽派手好きな文醜の適当発言に振り回される毎日。これに加え、当主があの自己中の塊である。そんな2人に板挟みにされて気苦労が絶えないな顔良だが、本人曰く慣れているらしい。第三者の目にはそうは見えないが…。

「それで奴さんはどういう状態？」

「えっと。今斥候送ったから…それ待ちかな」

「そっかぁ…暇だなー。そうだ！斗詩遊ぼうぜ～」

突然顔良の後ろから抱き着き、体を弄りだす。流石に状況が状況なだけに抵抗する顔良。しかし、弱点を知り尽くす文醜になし崩しにされていく。

「ちょっと！？文ちゃん！任務中…に！…やぁ！？」

にんまりと顔を歪める文醜はただの変態オヤジに成り下がっていた。

ちなみにそれを後で見ている兵士たちは目のやり場に困りつつも、満更でもない様子であったらしい。

刀

「短剣…銅剣…戟(げき)、戈(か)、ふむ…。色々手は出してるとこのようだ。」

趙雲を先頭に一刀と程立の3人が邑の隅にある鍛冶屋に足を踏み入れた。

質素な造りの外観は他の建物と一緒だが、内装は打ち台、水瓶、鞴(ふいご)や金づちなど、鍛冶に必要な設備や道具が所狭しと置かれ、壁や籠には鈍い色を放つ歴史の書物にイラストされていたものが実物として並べられていた。

一刀は男としても現代人代表としてもある種の興奮が沸き起こる。

年甲斐もなくキョロキョロしていると、汗と仕事汚れにまみれた青年が話し掛けてきた。

「やぁ。どぉもどぉも。直に手に取って見てください。一から造る場合は日数が掛かりますので。」

所謂職人は寡黙で気難しいイメージがあったのだが、真逆の人が出てきたので一瞬目を見張ったが、腕や手を見ると火傷の跡が納得させるのには十分であった。

「お兄さん。作り置きされてるものではないとだめですよ～。」

明日には出発する予定であるため完成するまで待っていられないのだ。

それにオーダーメイドはどの時代もお高い。

「武器は使い手次第ですからご自分の気に入ったものがよろしいですよ」

「北郷殿。槍は良いですぞ。なによりかっこいい。」

丁寧にアドバイスをしてくれる職人の青年に、横から自分と同じ得物（槍）を薦めてくる趙雲。せっかく自分の好みにするべきとのアドバイスをしてくれているのに無視した趙雲の発言は無視しておく。一応、かっこいいのであればやぶさかではなきな…と、記憶の片隅には入れておくが。

「それじゃあ剣（つるぎ）にしようかな…刀があればいいんだけど」

剣道部に所属し、祖父の道場で扱かれた経験のある一刀は真剣こそないものの、竹刀や木刀による基礎はそれなりにある。実際、有段者でもある。

そのため刀であれば、扱いに関してはまだ大丈夫だと思ったのだが、剣となると大小あれどやはり違ってくる。第一この時代に一刀の求める刀があるかどうかも怪しいところだ。

「ありますよ。刀」

あるそうです。一刀の目がシジミのように点になっていた。

早速、持ってきてもらい見てみるがどれも期待していたものとは違った。

「うーーん……ちょっと違うなぁ」

不服そうな一刀の反応にそうですかと、申し訳なさそうにする青年に慌てて言葉を追加する。
「あ！いえ、出来が悪いとかそうではなくてですね、欲しかった造りのと違うだけですから。」

見せてもらったものは片刃で、直刀の剣の様に“突く”ことを主体としたものではなく“切る”に適した刀にはなっているのだが反りもなく、鍔もない。しかも幅広で平造になっているものばかりで、惜しいものは改良が加わっているのか幅は日本刀に近くなっている切刃造に似た大刀である。

所謂“鎬造の日本刀ではないのだ。

専門語は省きながら簡単に形のみ説明しながら一刀は無意識に切刃造の大刀を静かに抜いて左半身に構える。その時趙雲の目つきが一瞬鋭くなる。

確かめるようにゆったりとした流れる動きで両手に持った刀を振りかぶり…円を描くように切り下ろした。

ビュンと、空気を切り裂く音が室内に響く。少し遅れて程立のやわらかな髪がふわりとなびく。

「……一番近い手応えはこれかな。…ん？どうしたのみんな？」

一刀は集中して気づかなかったが、周りは息を殺した様に静まり返っていた。呆然として皆に一刀が対応に困っていると趙雲が口を開く。

「…北郷殿は剣術の心得が？」

「まぁ。実戦で使うことは余り教えられてないけど…君達から見たらかじった程度かな」

それでも意外だったようで、趙雲も程立も感嘆の息を漏らしている。

「いやはや…おもしろいものを見れた。」

ニヤリと妖しげな笑みを向ける趙雲に何か肉食獣に狙われた気分になる。

眼を逸らすと不意に程立と視線が交差する。何だか心此処に在らずといった感じで一刀を見つめていた。不思議に思い呼び掛けると、なんでもありません。の一言でそっぽを向かれてしまっので、ます首を捻る一刀であった。

「そちらでよろしいですか？」

横から入ってきた刀工の青年の爽やかな笑み。程立の反応が少し気になるが、選ぶのが先と思い持っている刀剣を渡す。

「俺はこれがいいけど…お金払ってくれるのは彼女達なんだよね」

若干語尾が尻窄みしているのは男として女性に奢ってもらうのは気が引けるためである。

「お礼はいつでもいいですぞ。」

首を傾げて体をしならせる趙雲の姿がよく似合っていた。これは返

せなくても返そうと思ってしまう。

「ありがとう。必ず返すよ」

笑みを浮かべる趙雲は長い袖口から巾着を取り出して青年と売買の取引を始める。

何気なしに2人のやり取りを眺めているとある重大なことに気づく。その一刀の様子に隣で半分近くまでキャンディを舐めきっていた程立が、つつつと、近寄ってきて…。

「おう兄ちゃん。思い詰めた顔してどうしたんだい？」

いまいち宝慧の出てくるタイミングが分からない。程立の気まぐれだろうか…などと、一瞬頭を過ぎったが今はそんなことはどうでもいいことで、質問に対して答える。

「大変なことだ。生活していくうえで、お金の価値がおれには分からないんだけど。」

多分、字の読み書きも怪しい。会話は出来てるからまだ僥倖だろう。

「確かにそれは大変ですね～。」

眼を細めて一刀を見る。

「では、時間あるとき教えてあげましょうか～」

「え…いいの！」

願ってもない申し出である。元の世界に戻れるのは何時になるか分からないため、当分の間こちらの生活を余儀なくされるのだ。早い段階で習っておくことに越したことはない。

そのな約束を取り交わしている内に向こうも終わったらしい。

「では、行こうか。あとは足りない食料等の調達といこう。」

趙雲がズシリと重い大刀を一刀に手渡し入り口へと歩いていく。無為質な塊を一瞥した一刀は…静かに腰紐へ差して下げ緒をくくり付ける。その間に二人は外へ出て行くのを目の端で確認し一刀は刀工の青年へ向き直る。視線に気づいた青年は何でしょうと、表情で返す。

「…いえ、ありがとうございました。大事に使わせてもらいます」

微笑の会釈を済ませ、外に出ようとしたとき後ろからやけに達観した声が届く。

「武器は使い手しだい…。これは何も得意、不得意の話だけではありません。欲、権力、正義、盾、どの理由で使うかはあなたの自由です。結局はただの道具に過ぎないですから。しかし覚悟がないのであれば抜かないことをお勧めします。」

一刀は首だけ横に向ける。

「刀で切り開く道もあるかもしれません。大切な人を守るため正義を振りかざすかもしれません。だけど、どちらも血がつくことには変わりありませんから。」

お引止めして申し訳ありません…青年はそう言って武器の手入れをし始め、それっきりこちらを向くことはなかった。

一刀は一度大きく息を吸い込み、歩き出す。少々物騒で荷の重い護身刀は平和人の一刀に違和感を覚えさせるがしばらくすると気にならなくなっていた。

――刀を抜かざるを得ない時が来たとき自分はどうするのだろうか。宿への帰路の途中ふと考えてみたが何もわからなかった。そのときが来るまで見えないような気がする。

時代の波はすぐそこまで迫っていた。

桃園の誓い

「うーーん。…こうで合ってるかな。どう？」

「…私、北郷一刀は程仲徳の馬馬車として粉骨砕身働く所存です。」

「いや！書いてないよそんなこと！？まだ少ししか習ってないけど流石にわかるって！！」

買い物を済ませた一刀、趙雲、程立の３人は郭嘉が留守番している宿へと戻っていた。

その時、一刀は字の読み書きが出来ない事に気づき、程立に教えてもらう約束をしていた。今まで会話に困っていなかったので気にしてなかったが結構重要な問題なので後回しには出来ない。

そんなこんなで、借りた一室にマンツーマンで程立先生にご鞭撻してもらっている一刀。

木箱に砂を敷き詰め、棒で書き練習をして新しい字を書きたい時は砂を均せば元にもどる…なんとも経済的な練習方法だが、この世界は木簡と呼ばれる簾（すだれ）の様な巻物が主流で、紙もあるにはあるがとても高価なものらしい。

そのためこのやり方を考案すると３人は一様に関心して頷いた。

「なるほど。何気なくやっていた事をちょっと工夫するだけで便利になるものだな。」

一刀の顔のすぐ横に眼を丸くして覗き込む趙雲。端整な顔と鼻腔をくすぐる甘い香りに思わずドキリとしながら平静を保つ。

そんな様子をからかわれながら冒頭に戻るのだが、ご覧のように芳しくはない。適当な答え合わせと放任教育の程立と悪ノリして一緒にからかってくる趙雲では進むものも進まないというものだ。

こんなことなら漢文をもっと真剣に習っておくべきだったなと思う一刀であった。

余りにも適当な授業に見兼ねた戯志才が本についた虫を潰すように勢いよく閉じ、乾いた音が部屋に響く。

言わずもがな全員の視線が戯志才に集まる。

「まったく、いい加減にしなさい2人とも。真剣に学ぼうとしているのに失礼でしょう。」

窓際で読書していた戯志才は溜め息を零し一刀の対面に座り、木箱に書かれている文字を一瞥して間違っている箇所を直していく。

『…この人、堅そうな性格してるけど案外面倒見いいよな…。』

一刀が見る角度からは涼しげな目元が伏せられ、いつものきつめな表情に憂いが帯び…素直に綺麗だと思った。

見取れていると、小脇を突いてくる誰か。顔を横に向ければ程立が口許を隠しながらボソリと呟く。

「兄ちゃん。真面目そうな奴に限って厄介なものを抱えてるっても

んだぜ」

口調は宝慧だったが、さの内容はいまいち理解出来なかった。

『…厄介？』

視線を戯志才に戻す。もしかしてこの人のことを言っているのかと、目配せで尋ねるが既に寝入っていた程立に真相を聞くことは叶わなかった。

結局何だったんだと首を傾げていると不意に戯志才と眼が合う。

「…ん？」

こてんと可愛らしく傾げる。すると、面白いように戯志才の肩が震えていた。

「…“ん”じゃ、ありません！！貴方聞く気があるのですか！」

机が悲鳴を上げるほど平手をたたき付ける。余りの凄まじさに腰が抜ける一刀。

「ひぃ！？すいません！ちゃんと聞きますぅ！！」

「北郷殿は本当に面白いな。天の国の人は皆そうなのか」

「さぁ～。多分お兄さんだけだと思いますよ～」

暢気な二人を余所に、一刀は戯志才のスパルタバージョンにより、一夜でメキメキと語学を覚えて行くのだった。

◆◇◆◇

幾つもの屍が大地に重なり転がっていた。そのほとんどはろくな装備も出来ていない農夫と変わらない人達であった。

「あ〝ー…やっと終わった。帰ろうぜ斗詩。」

「…うん。お疲れ様…文ちゃん」

苛立ちを隠せない文醜。ガシガシと若葉色の髪を掻きむしる後ろ姿はどこか納得仕切れない雰囲気が漂っていた。

その気持ちを顔良もわかっていた。相手は民に害をなす賊であるのだ…見過ごす訳にはいかない。だが、皮肉なことにその賊たちこそ民なのだ。現在の漢王朝に不満を抱える貧しい民たちが訴えても聞く耳を持たないお上に牙を向いただけ…。

誰が悪いかなんて口にしなくともわかっていること。

だけど誰も口にはしない。出来たならこんなことにはなっていないのだから。

だが、誰もが待っている。声高々に鬨を上げ、暗雲たる時代を切り裂く英雄を…

◆◇◆◇

「……綺麗」

「桃香様。席の用意が出来ました。」

桃園に咲く桜色の花に負けないほどの髪をたなびかせ、うっとりと景色に頬を綻ばせる桃香と呼ばれた女性は大人の一歩手前のような甘酸っぱい雰囲気を纏う。その正体は後の蜀漢を興す劉備玄徳。

盃や椅子を後ろで用意しながら優しい眼差しで自身の敬愛する主人を呼ぶのは――――

「うん！わかった。愛紗ちゃん。」

――――真名を愛紗（あいしゃ）と云う、長く艶やかな黒髪をもつ関羽雲長であった。

「鈴々（りんりん）！！いつまでも寝てないでこっちに来て手伝いなさい！」

キョロキョロと関羽が誰かを探して呼ぶが何処にも見当たらない。すると劉備のアワアワとした声が木の上で危なっかしく昼寝している鈴々を見つける。

「り、鈴々ちゃん！！危ないよ！」

「鈴々！早く降りなさい！怪我でもしたらどうするの！！」

二人の心配を余所にあともう少しと涎を垂らし夢心地の鈴々こと張飛翼徳である。

その日、３人は義姉妹になり後の黄布の乱より頭角を現すが、一刀と出会うのはもう少し後である。

桃園の誓い（後書き）

遅くなりました。ちょっと忙しかったので…

（；´・ω・）

渤海（前書き）

皆さんお久しぶりです。

学校が一段落したのでようやく執筆できました！

短いですがとりあえず生きてますよーという報告も兼ねて投稿です。

渤海

渤海へと続く公道が、例の黄色い巾を被る賊集団に占拠されてから数日後。袁紹の部下である文醜、顔良の率いる討伐軍が鎮圧したとの知らせが入ってきた。

それを聞くと同時に一緒に足止めを食らっていた商人や浪人、その他諸々の用事を抱えていた人たちがようやくかと口々に愚痴を零しながら一斉に動き出す。

一刀たちも遅れずに部屋を引き払い渤海への道を歩き出した。勿論その時も文字の勉強を欠かさず続ける姿はまるで二宮金次郎を髣髴(ほうふつ)させるがこの世界では誰も分らないだろう。

道すがら一刀は不意に顔をあげる。何と言うことのない自然の光景。澄んだ空気は都会にはなかったが、やはり柔らかな陽差しと葉の隙間から覗く木漏れ日はアットホームな住宅街を歩いているように感じ、自分が別の世界に来ていることを忘れてしまいそうになる。

もう何日経っただろうか…。戯志才から借りた本を閉じ、日差しの眩しさに一刀は眼を細めた。

木陰の下に一刀、趙雲、戯志才こと郭嘉、程立の４人が一休みしていた。主に一刀の体力不足が原因だが…。

途中まで見えていた他の商人たちはやはり現役と言うべきか、それ

とも交通手段の乏しいこの時代だからなのか、強靭な足腰と体力でぐいぐい差をつけられあっという間に姿が見えなくなってしまった。

「…ところで勃海での目的は？」

水筒から口を離し、一刀は戯志才に問い掛ける。

「領主である袁紹に会うことですね。」

名家である袁。一刀の頭の中には余り名君というイメージはない。知識としても物語としても袁家には良い印象が見当たらないのだが、実際に会わないと断言するのは失礼だろうか…。それよりもやはり女性なのだろうか…という方が気になってしまう一刀である。

目的地の渤海に着いたのはまた数日後。すっかり足がパンパンに張ってしまっているのを我慢して四方を壁で囲んだ検問を潜ると目に飛び込んできたのはまさに豪華絢爛な城が聳え立っている。まるで力を誇示しているかのように。

「それにしても活気がすごいな」

喧騒と雑多が入り混じる通りには老若男女。さすが華北一の大都市というべきか。変に動き回ったら簡単に迷子になりそうだ。一刀はこれからの日程を聞こうと後ろにいるみんなへ向き直る。

「まぁ…そういう展開？」

見事に逸れていた。

迷子のときは動かずにいなさい。そんな言葉を思い出したのは表通りを外れて猫と犬が抗争を繰り広げる裏道を抜け、活気ある街の裏側である物乞いの聖地を突っ切り、同じく迷子らしき幼女と一緒に親を探すため街を練り歩いていつの間にか露店巡りを幼女と仲良くしていたあたりで気づいた。

『やっべぇー…俺はあほかもしれん』

「ねぇねぇ。おなかすいたぁ」

袖を引っ張る幼女。

「……何が食べたい」

とりあえず小腹が空いたのは確かなので適当に美味しい匂いを振りまく店へと足を運ぶことにした。まだ少し昼前時だが客が結構入っている。所謂ラーメン店のようなB級感漂う飯店には気さくそうな捻り鉢巻の似合うおっちゃんが一人厨房で鍋を掻き回しながらこちらを一瞥。

「適当に座ってくれっ。水は自分でなっ！」

威勢のいい声が飛んでくる。まぁここでいいかと、幼女を近くの円卓へ座らせ自分も座ろうとしたとき、おっちゃんの声にも負けないくらい大きな声でおかわりを注文する女の人がいた。思わず見遣っていると視線に気づいた女が一刀にガンを飛ばしてくる。

「何見てんだよぉ。あたいは今機嫌が悪いんだ…喧嘩なら買うぜぇ」

柄の悪い言葉で突っかかってきそうになり、やばいと幼女を庇うように前に出ると同時に隣にいた違う女性が諌めるように女の腕を掴む。

「ちょっと文ちゃん！やめなさいよ。　すいませんお騒がせして。ほら文ちゃんも謝って！！」

一刀たちと他の客にも丁寧に謝罪のお辞儀する女性。それを見て罰の悪そうな顔になる若葉色の髪が映える女も、頭を掻きながらぺこっと下げる。

「ごめん…ちょっとムシャクシャしてて…」

「いや…そんな。何か此方も気に障るようなことしてしまって」

お互いぺこぺこと頭を下げる変な光景が繰り広げられるが、そんな状態を破ったのは店のおっちゃんだった。

「おい！あんまり店で騒ぐなよっ。ほら！チャーシュー麺。兄ちゃんと嬢ちゃんは決まったのかい？」

そういえばと、頬を掻く。後ろでプルプル震えていた幼女にごめんと頭を一撫でして注文を待っていると先ほどの二人が円卓に近づいてきて…。

「あのぉ。先ほどのお詫びに私たちが料金立て替えます。」

おかっぱの様な髪型をした礼儀正しい女の子が飯代を健気にも払ってくれるらしい。ただ一刀としてあのくらいのことで…と思い、断ろうとしたが丁度良いタイミングで財布事情に困っていたのだ。何

故ならこの幼女。思った以上に食べるのだ。

「……お言葉に甘えさせていただきます」

「おじちゃん！ぎょーじゃおかわりっ！！」

「「「……」」」

一刀とおかっぱの女性はお互いを見合い、若干の苦笑い。若葉髪の女はとりあえずヘラッと笑っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9143p/

三國志　～恋姫無双～

2011年10月6日21時22分発行